

■ やはり、安里報告書はデータ改竄の捏造報告書である

永津 禎三

安里進氏は〈永津が「捏造」は間違いだったと認めた〉と喧伝したいようだが、これは全く事実と正反対である。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵写真（新資料写真）が公表されたことで、私は改めて、安里氏がデータを改竄し捏造報告を行ったことは間違いのないことだったと確信した。

トグロ巻部の向きについての私の認識の誤りを指摘しただけで、安里氏は自らの報告書での論証手順・方法が異常であることについては何も説明していない。

「吡形大龍柱のトグロ巻きの展開図」を根拠に「戦前大龍柱（吡形）のトグロ巻部背面にホゾ穴が存在しないという事実」を明らかにしようとし、さらに、その「展開図」の「背面」は二つの写真を合成していたという、この異常な手順・方法を、である。

まずは、報告書の問題の図を再確認したい。報告書 31 ページの図 2 と 32 ページの図 3 である。

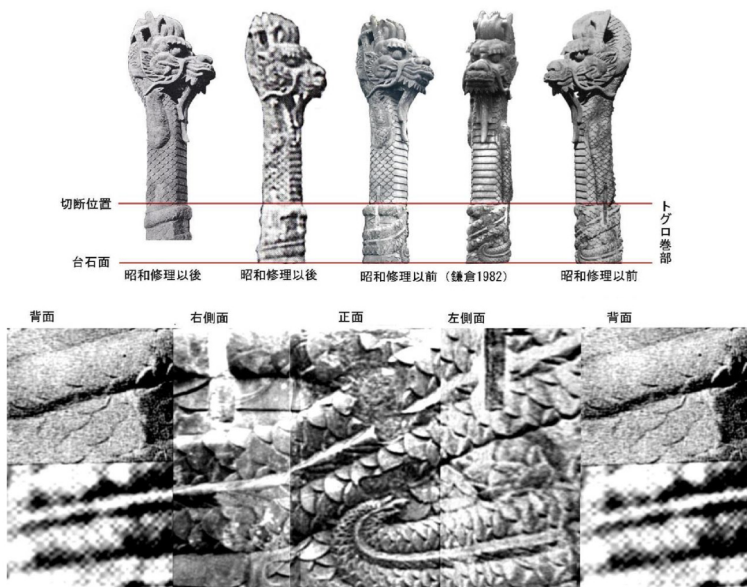


図 2：吡形大龍柱のトグロ巻きの展開図

戦前大龍柱の左右側面にカスガイが打ち込まれている。背面にも他の面にもホゾ穴がない。



図 3：吡形大龍柱の背面（欄干に連結するホゾ穴がない）

昭和修理で、頭部～胴部と基部（トグロ巻）の向きがズレている。トグロ巻き背面には、欄干部材に連結するホゾ穴や無彫刻部分がない。戦前大龍柱は、制作当初から欄干に連結せず台石上で自立していたことが分かる。

図 2 の展開図の上に並ぶ 5 つの大龍柱吡形の写真、その左端と左から 2 番目の写真を合成したものが図 3 の「昭和修理後の吡形」の図である。図 2 の左端と左から 2 番目の写真には出典が記されていない。左端は田辺泰『琉球建築』掲載の写真と分かったが、左から 2 番目の写真がどこからのものか不明だった。写真は龍柱だけが切り抜かれているので、左から 2 番目の写真のトグロ巻部は台石と接するところまで全て写っているのか判断ができない。



写真 1：昭和修理竣工前の吡形大龍柱とトグロ巻き部背面の拡大。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵

ところが、この左から 2 番目の写真こそ、安里氏が 6 月 2 日付「ホゾ穴と正面向き復元下」で「新たに入手した」という「写真 1」つまり（新資料写真）であった。

図 2 の左から 2 番目の写真は、かなり不鮮明ではっきりしないが、写真 1 であれば、頭部が正面向きの面のトグロ巻部は右側面であることがはっきり確認できる。吡形大龍柱の背面が御庭側に向いていることを示す新資料写真が見つかったと報告すれば良いだけである。

それなのに、安里氏はわざわざ大龍柱の形だけを切り抜き、トグロ巻部の途中から上を田辺泰の写真に置き換えて「吡形大龍柱のトグロ巻の展開図」を作ったのである。

6月2日付「ホゾ穴と正面向き復元下」図3で、安里進氏は背面を写真1に差し替えた「戦前の吽形大龍柱のトグロ巻展開図」を示している。西村貞雄氏復元平成大龍柱の写真から作成したトグロ巻展開図と比較して、この展開図が正しいと主張しているが、先ほど述べたように、写真1で既に明快なのだから、わざわざ展開図を作る必要などなかったのである。

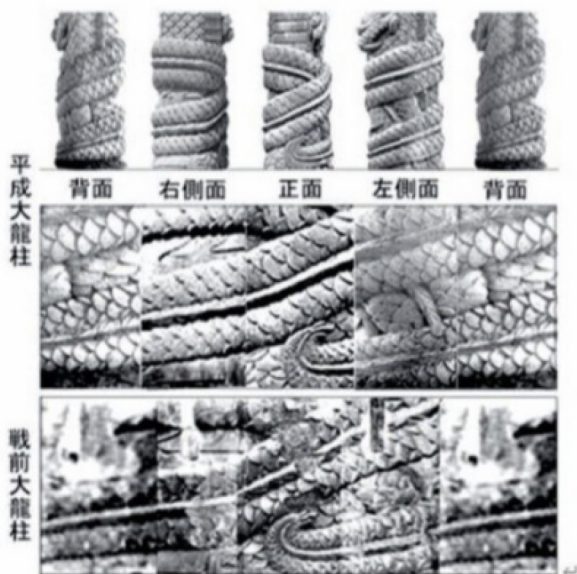


図3：平成と戦前の吽形大龍柱のトグロ巻展開図。戦前大龍柱の右側面・正面・左側面は沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵（鎌倉芳太郎撮影）。背面は東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵

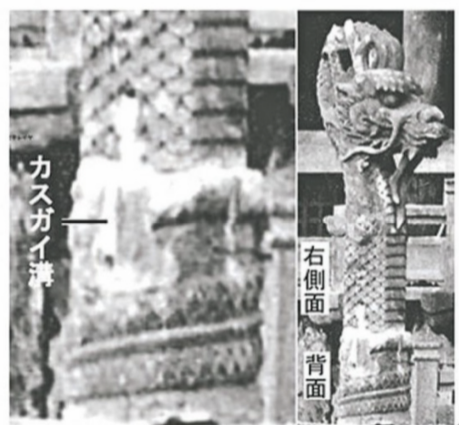
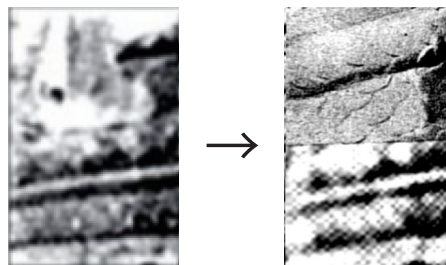


写真1：昭和修理竣工前の吽形大龍柱とトグロ巻き部背面の拡大。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵



それでは何故、安里氏はわざわざ展開図を作ったのか、しかも報告書の時点では田村泰の写真を被せたのか。それは「戦前大龍柱の背面にホゾ穴が存在しないという事実」と断言したいがための行為だったのではないか。

つまり、「新資料写真」のトグロ巻部の上部、ホゾ穴があったかどうかを慎重に検討すべき欠損部分を、「石灰様のもので盛り上げて補修」した後の写真を被せることで隠すためだったのであろう。これを「改竄」以外の何と呼ぶのだろうか。

安里氏は6月2日付「ホゾ穴と正面向き復元下」で、写真1を分析してこう述べている。（当然、展開図の方では分析しない）

「大龍柱に連結する欄干の羽目板や親柱は、ホゾの突出が約3センチでこれを嵌め込むホゾ穴の深さは約4センチある。写真1の欠損部分にホゾ穴があるとすれば、カスガイ溝よりも深くて大きなホゾ穴が開けられていたはずだが、その形跡は全くない。欠損部にはホゾ穴はなかったと私は考えている。」

これは全く客観性を欠く考察である。ホゾ穴はそのまま放置されていたとは考えにくく、同じ種類の石材で埋められていただろうし、ホゾ穴の周りの無彫刻部分にカスガイが嵌められていたとも考えられるからである。



図1：昭和修理以前と以後の阿形大龍柱

①～③沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵（鎌倉芳太郎撮影）。④東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵。⑤『沖縄 昭和10年代』より（撮影：坂本万七）

熊本鎮台沖縄分遣隊によって折られた戦前大龍柱の阿形、それに合わせて切断された吽形の頭部胴体と台石上のトグロ巻部が繋ぎ合わされた時、カスガイはそれぞれ三箇所嵌められたことが、鎌倉芳太郎と坂本万七の写真、そして「新資料写真」から確認できる。阿形は左右と前面、吽形は左右と背面の三箇所である。

「新資料写真」の吽形は今回かなり解像度の良い写真を公開したが、阿形については6月1日付の図1④で背景を切り取った小さな写真を公開しただけである。この阿形についても、解像度が良く切り抜きなどされていない写真を公開すべきである。

阿形のトグロ巻部背面にはカスガイ跡は無いはずなので、ホゾ穴の存在の有無を確認できる可能性が高いと考えられるからだ。技術検討委員会は、「新資料写真」のような新しく入手した重要な資料は、オリジナルな状態ですぐに公開すべきである。さまざまな分野の多くの人の目に触れ検討が行われることでしか事実への認識は進まないからである。

9月29日付「大龍柱と台石の機能下」で、安里進氏は「図4のように台石に抉りを入れて親柱を嵌め込んで固定して欄干を支えている。台石は、大龍柱と構造的に一体化して欄干を支える重要な構築物で、西村氏が想像するような応急的な仮設物ではない。」と図4の写真と図面を載せている。安里氏は、大龍柱が欄干と直接接続していた（西村説）のは、戦前大龍柱の時にはありえなかったと言うために、報告書（37ページ図1）でも同様の記述を行っているが、欄干を支えていた大龍柱を台石の上に据える応急的な処置をしたときに台石が大龍柱に変わって欄干を支えるように細工するのは自然であり、この言説は西村説が誤っているかのように思わせる印象操作でしかない。

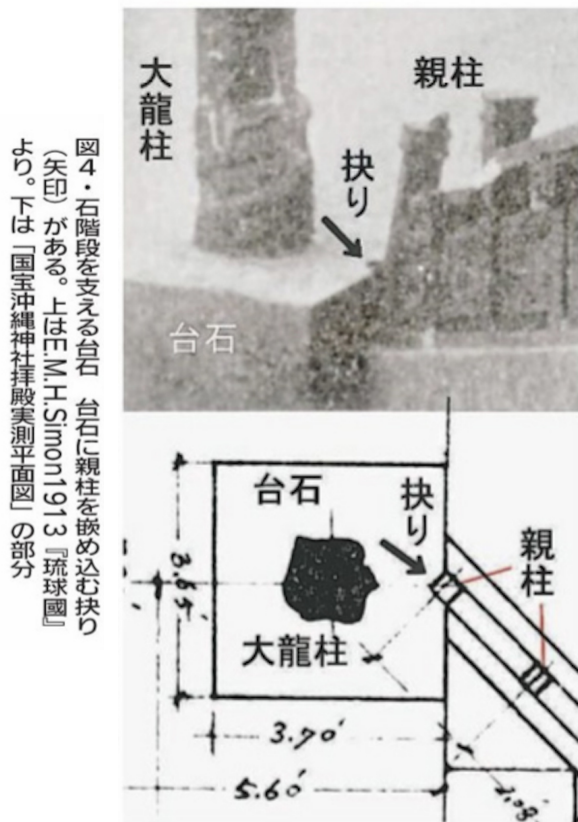


図4・石階段を支える台石 台石に親柱を嵌め込む抉り(矢印)がある。上はE.M.H.Simon1913『琉球國』より。下は「国宝沖縄神社拝殿実測平面図」の部分

はじめ、9月29日図4写真は報告書掲載の写真と同じものかとあまり注目しなかったのだが、後日、記事を見直して、この写真は初めて見るものと気付いた。

報告書では、鎌倉芳太郎撮影の阿形大龍柱と台石や欄干が写っていた写真に阿形の図面だったが、こちらは吽形の写真と図面である。

しかも、この写真は1913年発行の書籍に掲載されていたものらしい。つまり、昭和の大修理で沖縄神社拝殿にするために対面向きにされる以前の吽形大龍柱の姿が後ろ側から撮影されている。

トグロ巻部の背面が写されている写真、しかも「新資料写真」よりも弄られていない状態の貴重な「新発見写真」だった。

こんな重要な写真が、証明にもならない「抉り」を見せるためだけに公開されたのである。

大龍柱の背面の状態を正しく知るために、まずは、この写真のオリジナルが公開されなければならない。

おそらく技術検討委員会には、このような重要な写真が、注目されることなく、数多く眠っているに違いない。

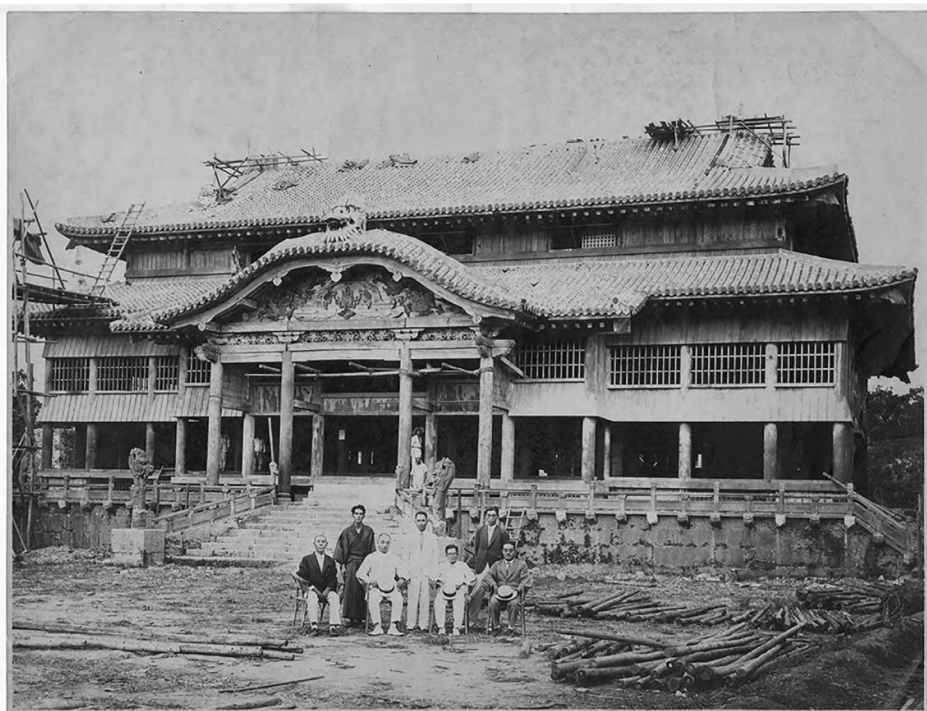
時に、「新資料写真」のように、オリジナルを隠し、切り抜き、自説に都合の良い形に加工され使われてしまうのである。

「首里城正殿写真」（新資料写真）は、所蔵先の東京大学大学院工学系研究科建築学専攻に問い合わせたところ、現在デジタルミュージアムを準備中で、すぐに『N27』第10号への画像掲載許可をいただいた。『N27』第10号は10月末発行予定なので、それまで、この写真の取り扱い、拡散されないようご注意ください。

写真は、かなり鮮明で、阿形大龍柱の御庭に向けられたトグロ巻部の背面の欠損部分も、ホゾ穴の存在を確認するために重要な資料になるかもしれない。

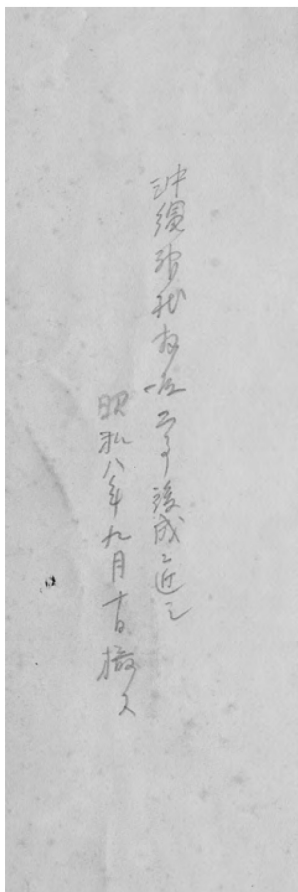
令和の復元は、「見える」復元にするなど喧伝し、作業場をガラス張りにするなどしているようだが、本当に「見える」化に必要なのは、その審議過程や、そのための資料である。

特に技術検討委員会が、一部の人間だけで、これを独占し、意図的、操作的に資料を用いているのは許し難い行為である。私の「捏造」告発はこれへの危機意識からである。



東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵「首里城正殿写真」（新資料写真）

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵「首里城正殿写真」(新資料写真)



写真裏面



大龍柱咩形
拡大



大龍柱阿形
拡大



■やはり、安里報告書はデータ改竄の捏造報告書である

著者 永津 禎三

2022年10月6日 私家版 発行